

【末廣狩 解説】

今日では「末広がり」と表記するが、原典では「狩」という当て字が使われている。「末広がり」とは扇わっかの別名であるが、その形状から「時が経つほど運が開ける様子」も意味している。

長唄「末廣狩」は、同名の狂言きょうげんが元になっているが、よく知られた狂言であるので、解説は割愛する。長唄の「末広狩」では登場人物が女主人に変更され、かつ、恋物語に脚色されている。元の狂言に興味のある方は、お調べ頂くと面白いし、より長唄の脚色に合点のゆく所もあるう。

恋物語で言えば、扇は平安の昔から、男性から女性へのプレゼントである。恐らくは和歌を添えて贈るものであろう。「白扇」とは絵柄など何も書いていない扇であるから、それに和歌を書いてもよさそうなものだが、それも書いてない。扇を貰った女主人は彼氏の心を測りかねているわけである。「名のみなり」とあるので、贈り主の名前だけは書いてあったようだ。

「青骨」とは扇の骨で、未だよく加工がなされておらず、漆うるしなども塗布されていない青竹状態の、「初めの頃」を指すようだが、扇の部位名称にはない言葉なので、ハッキリしない。中国語では「若者」の意味である。

「青」は、掛詞で「逢う」を指すとも考えられる。両端の扇の骨を合わせる、即ち男女が「逢う」ことを掛けている。



「四方の海」とは日本を取り巻く世界のことだが、「四つの海」も同じで、それを受けて「君が代」と云う場合は「天皇の治世」、即ち日本を指す。そこまで大きく言わなくても、平和な国の中で繁栄をしている主家の「当主の代」を、めでたいことだとしているのだ。

現代人にとって、海岸に寄せる波音は「サブン」とか「ザーツ」とか聞こえるが、昔の人々は鼓つづみを打つ音に聞こえたようで、「波の鼓」は波音を表す定番の表現である。

それは波音が永遠に続く繰り返しであるから、「打ちかける鼓」(何度も打つ)を連想するのである。そこには一種の執念がある。

鼓の「繰り返し」が執念に繋がるとすれば、諸兄は能の「綾鼓」という作品を思い起こすかも知れない。更に、現代においても尚、

若き日の恋は、はにかみて面おもてを赤らめ、

壮士時の四十歳の恋は、世の中にかれこれ心こころ配くばれども、

墓場に近き、老いらくの恋は怖るる何ものもなし(川田順)

詩人ゲーテは、七十二歳のときマリーエンバートの湯治場で、ウルリーケという十七歳の少女に熱烈な恋をした。三者三様、歴史に残っている。

長唄末廣狩が祝言曲にも拘わらず、「老いらくの恋」にワープするのは、主人公が若き娘ではなく、女主人であるという脚色から来ているように筆者は思うのである。

了